



DREAM OF JAPANESE WHEEL

## 日本のホイールに憧れるアメリカの若者達

日本でアメリカのカーカルチャーが憧れの存在として多くのファンを魅了するように、日本のカーカルチャーはアメリカの若者達の憧れの的となっている。加熱するJDMマーケットの中で「ワーク」が勝ち得た信頼。

Special Thanks / WORK <http://www.work-wheels.co.jp/>



映画やTVドラマが、アメリカのカルチャーと出会うきっかけになったという人は少なくないはず。でも、ハリウッドの大作映画みたいな世界に、現実のアメリカでお目にかかることはなかなか難しい。街中でのカーチェイスも、ギャング同志の銃撃戦も、あくまでもスクリーンやテレビの世界での日常だ。ところが、クルマの世界では現実が映画並みのリアルさで目の前に現れたりするから驚かされる。映画「ワイルドスピード」が描いている世界は、誇張されている部分はあるとしても、現実のアメリカで実際に繰り返されているのである。

ご存知の方も多いと思うが、毎年11月に開催されるSEMAショーでは、「ワイルドスピード」に登場する様な劇中車が多数展示される。まさに、日本の高性能スポー

ツカーに憧れる若者たちの世界が具現化された、世界最大の見本市なのだ。ここでは、ホットロッド&カスタムの住人はとっくの昔に隅に追いやられてしまった。代わりに大勢を占めるのが日本車や日本のチューニングパーツを使ったカスタムスタイルである。彼らにとってアメリカ車はローテクの塊であり、琴線に触れ、食指を動かされるのはあくまでも日本のスポーツカーなのだ。

中でもジャパン・ドメスティック・マーケット＝JDMと呼ばれる日本市場の車両やパーツは最大級の注目を浴びる。これは日本人がアメリカのカーカルチャーに憧れるのとまったく同じ理屈。JDMを愉しむ彼らにとって、あくまでも憧れるのは「日本」であり、「日本のチューニングパーツ」なのだ。

そんなJDMの世界で、アメリカの若者たちに絶大な人気を誇るホイールブランドと

いえば、大阪に本拠地を置く「ワーク」だろう。SEMAショーでも多くのデモカーに装着されている「ワーク」は、本格的なモータースポーツの世界で鍛え上げられた徹底した機能性により、ドリフトやドラッグレースの世界でもファンが多い。スタードライバーのマシンに装着されるだけの实力を持つことで高性能さが証明され、それが憧れに繋がるのだ。

日本発のブランドであるはずの「ワーク」だが、巡り巡って「ワーク」を装着することがこれまたアメリカっぽくクルマをドレスアップするポイントになるのである。日本製なのにアメリカ的。アメリカっぽいのではなく、本物であるが故にアメリカ的という「ワーク」のホイールは、日本からみるとアメリカン・カスタムの最前線を走るトップランナーともいえる存在なのだ。



ロケット・バニー・ボスキットで組み上げられたS14シルビアが装着しているホイールは、「ワーク」がストリートでの新たな機軸を構築していくために打ち出した「Seeker」ブランドの「Seeker GX」の17インチだ。



## オールドスクールとニュースクールが融合した美しい造形がストリートで注目を集める



JDMマーケットの中で人気を集めているのが「ワーク」の「Seeker」ブランドである。「Seeker」が探究者という意味を持つことから分かる通り、このブランドは造形、ターゲット、フィットメントに徹底的にこだわってきたのだ。「ワーク」が長年培ってきた経験、そして「Seeker」の登場までに重ねてきた開発努力によって生まれた「Seeker」はどのストリートにいたとしても一際輝く存在感を放つものとなった。デザインにおいてもヴィンテージやクラ

シックから得ることができる“古き良き”をただ踏襲するだけでなく、同時に新しい何かを融合させることに努めた。オールドスクールとニュースクールが見事に融合されたその時、「GX」と「NX」の2つのモデルが誕生したのだ。メインターゲットとするのは2000年以前の車両だ。

サイズ展開も16インチのコンパクトカーから、18インチのD,Eセグメントまで幅広いニーズに応えている。ここではそれぞれのデザイン性に注目していこう。



GXの特徴はなんといっても、長大な面積を持つフラットディスクにクラシカルなメッシュデザインで型抜きをしたようなデザインである。ディープセンターコーンも特徴的で細部に至るまでのこだわりを感じることができる。どこかクラシカルな雰囲気を感じながらも、もちろん新型車にもマッチする造形であるため長く楽しむことができるだろう。



ファイブスポークを模るディッシュ面と、大きな台形の開口が存在感を放っている。どこか懐かしさやノスタルジックを感じさせる造形はまさに古き良さをモディファイさせながら現代に蘇らせたと言える。クラシカルな5ホールディッシュデザインは新たなスタイリングの提案者だ。